

QU テスト結果の比較から考えられる児童の実態について

○実施目的

児童の自己実現能力の育成をよりよく図るために、児童に対し心理テストを実施することで教員による児童理解を視覚的に促し、学級や児童支援についての校内連携を進める。

○実施内容

QU テスト（年間2回（6・11月）の心理テストを実施）

○実施方法

1回目のテスト実施後、4つに分けられるプロット図の位置から2回目の位置と比較し、心理状況が向上した児童（A群）、心理状況が横ばいであった児童・下落した児童（B群）の2パターンを抽出し、対象となった児童の様子（生活面・学習面の様子、学校行事での様子、気になることやつまづいていること）を担当が記述したものをキーワード化する。2パターン内でどのキーワードが頻出したかを分析することで、実践の反省の手がかりや今後の取組の重点として活かす。

○実施結果

【A群（心理状態が向上した児童）の特徴】

- ・日々の授業や学校生活の中で、「友達から自分の良さを認めてもらう」、「友達の良いところを見つけ、言語化して相手に伝える」、「自分の努力したこと（過程や結果など）について褒めてもらう」傾向が多かった児童ほど、心理状態が向上した。
- ・学校行事において、「責任感をもって自分の役割を果たす」、「目的や目標に向かって、自分の課題を解決するために努力する」、「組織の力で物事を成し遂げようとする一体感を大切にする」、「自分や組織の能力の伸びを理解し、肯定的に捉えている」傾向が多かった児童ほど、心理状態が向上した。

【B群（心理状態の変化が少ないか下降気味であった児童）の特徴】

- ・日々の授業や学校生活の中で、「言語的なつまづき（相手の話の内容が理解しづらい、違う意味で受け取るなど）による対人関係の難しさ（叩く、罵るなど）を感じる」、「学習理解度・習熟度に伴う積み上げの難しさを感じる」傾向が多かった児童ほど、心理状態が良好ではなかった。
- ・学校行事において、「自信のなさ（走ることが苦手、楽器を演奏することが苦手など）に伴う活動意欲の低下が見受けられる」傾向が多かった児童ほど、心理状態が良好ではなかった。

○実施における考察

- ・A群の結果から、平素の授業や学校行事は、子どもの伸びを感じられる場面設定、適切な評価を講じることによって児童の自尊感情や自己肯定感を育める重要な教育活動であることを再確認できた。
- ・B群の結果から、児童一人ひとりの困り感を見出し寄り添うことが大切である。個々それぞれ異なるつまづきに的確に対応することで、児童が自信を持ち、自力解決まで教師が支援することが重要であることが分かった。